no.10

からしだね書店便り

10 2021 October

ＣＬＣからしだね書店では…

1. キリスト教書のほか、福祉、心理、精神、哲学、児童書、その他一般の良書もたくさん揃えたいと思います。
2. お洒落でかわいい雑貨や小物もあります。
3. ブックカフェとして、ドリンクやスイーツ、ランチ等をご提供しています。ゆっくり本を読みながら、お過ごしください。
4. コーヒーを飲みにきてくださるだけでもけっこうです。
5. 図書コーナーも併設予定です。ドリンクを片手に、お好きな本を手に取ってお読みください。
6. 古書の販売もする予定です。
7. 読書会や著者を招いての講演会など、人と人とが出会い、つながる「対話」の場を提供したいと考えています

「読書感想本」

「途上にあり続けること」の意味

『オウムからの帰還』　高橋英利著　草思社文庫

暑い夏が過ぎていった。事件の概要が少しずつ明らかになっていく。自分が全霊をかたむけていたはずのものが、眼の前で色褪せ、腐敗をはじめ、悪臭を放ちながらどろどろに溶けて醜怪な本体をあらわすのを、僕は視つめつづけねばならなかった。（272頁）

これはオウム真理教の元信者である著者が、１９９５年（地下鉄サリン事件が起こった年）にオウム真理教が犯した数々の犯罪の事実を報道で知った時の心境を述べたものです。

著者は94年5月にオウム真理教団に出家し、地下鉄サリン事件後の95年4月に脱会しました。オウムの犯罪には一切関わっておらず、その事実を知ってもいませんでした。本書は元信者の著者による、内部から見たオウム真理教の報告です。

著者はオウム真理教に入信する前の幼・少年時代の記憶から語り始めます。１９６７年生まれの著者は、東京の巨大で画一的な団地で少年期を過ごし、自分の存在に「必然性がないということの不安（29頁）」を持っていたと言います。大学時代にキルケゴール、ショーペンハウアー、グルジェフ、クリシュナムルティといった哲学者や神秘思想家の本を読んだり、精力的にサークル活動をしたりして自分の生きる意味を模索するようになります。

当時オウム真理教は全国の大学で講演会を開いて積極的に学生を勧誘していました。著者の在学していた信州大学でも講演会が行われ、興味を持った著者はそれに出席して麻原彰晃に直接質問をぶつけます。その真剣な姿勢にオウムへの関心を見て取った井上嘉浩が、講演会場を後にする著者を追いかけてオウムの修行を勧めました。井上の人柄に惹かれた著者はその場で入信の手続きを取ります。

その後著者は拡大していくオウム教団の方針や厳しい修行についていけなくなり、一度は脱会し、大学院での研究生活に専念することになるのですが、暫くすると大学院での研究に意味を見出せなくなり、うつ状態におちいり、救いをもとめるように再度入信を決意します。教団に戻った時の心境を著者は以下のように表現します。

なんだか懐かしい場所に帰ってきたようだった。やはりここなんだ。僕のいるべきところは、やっぱりここしかないんだ……。（85頁）

入信をめぐって家族との関係も悪化し、大学院での研究生活にも行き詰まった著者は、居場所としてのオウム真理教に戻ってきたのでした。そして麻原彰晃が「ハルマゲドンはもう始まっている」等と過激な思想を説き始めると、それに乗せられるようにして出家に至ります。オウムの出家は家族との関係や財産をすべて捨てることを意味しますが、著者はそれらを捨てることにあまり抵抗を感じません。

考えてみれば、僕が高校生のとき熱中していたバドミントンも受験勉強も、あらかじめ設定されていたゲームだったと言えるだろう。設定された世界のなかで僕は熱中した。だが、設定されたものであるがゆえに、それは交換可能なものだった。僕は世のなかのあらゆるものに対して「どうしてもなくてはならない」ものとしての必然性を感じることができなかった。それを棄てろと言われ、その理由に納得がいけば、僕はあっさりと捨てることができたのだと思う。（103頁）

このように、生活や人生のあらゆる要素を相対化する冷めた見方を持っているということが、著者をして宗教や哲学の世界に向かわせた要因だったようです。何かに熱中しながらも、それは「設定されたゲーム」に過ぎず、一歩枠の外に出れば途端に意味を失ってしまうということを同時に意識している。だからこそ、冷めた見方の裏返しとして、絶対的なものや確かなものを熱烈に求めるという傾向が現れる。そしてひとたび絶対的なものを手にしてしまうと、今まで熱烈に求めていただけにそれを手放すのは非常に困難になる。オウムが疑似国家として「省庁制」を敷いたり、ゲーム的な昇格システムを持っていたことなどを考え合わせると、著者の言う「設定されたゲーム」という表現は皮肉に響きます。

しかし著者の冷めた見方は、出家した後もなくなったわけではありませんでした。「毒ガス攻撃を受けている」などと荒唐無稽な陰謀論をとなえる教団、それを盲目的に信じる信徒たち、薬物を使用した「イニシエーション」と呼ばれる儀式。それらを目にし、経験した著者は、次第に教団への疑問を深めていきます。

地下鉄サリン事件の二日後、三月二十二日に行われた警察による強制捜査によって、著者は今まで教団に対して抱いて

いた疑念をさらに強めます。教団は警察の捜査を「でっち上げ」「宗教弾圧」「陰謀」と説明していましたが、明らかな異常事態を前にしてこのような説明では納得できず、著者は教団幹部に個人的に説明を求めましたが明確な答えは得られませんでした。そこで著者は真相を確かめるために教団から脱出し、オウム真理教を外の世界から見ることを決意します。

教団から脱出した著者を待っていたのは、残酷な現実でした。五月十六日には麻原彰晃が逮捕され、その後教団の犯行が次々に明らかになっていきます。

脱会してからのほうが、むしろ僕の苦しみは大きかった。自らの意志で選び、それまで出会ったことのない価値観をもつ集団だと判断したものの実体がこれだったのである。自分の属していた団体が、あれほどの人命を奪っていたのである。（273頁）

オウム真理教が破壊したもう一つの現実がここにあります。苦難の末、ようやくたどりついた場所で見つけた価値が、無残に崩壊していく過程を見つめ続けなければならない。自分が「全霊をかたむけていた」ものが悪であったと認めなければならない。これは単に信じていたものに裏切られたというだけでなく、自分自身に裏切られたということでもあります。

このような体験をした著者は、もはや自分を信じることができなくなり、自分の中にある闇を見つめざるを得なくなります。著者は豊田亨の裁判に弁護側証人として出廷したときの心境を、次のように語ります。

彼の裁判であったにもかかわらず、僕は自分自身が裁かれていた。／このとき、一切の弁明をせず、終始自分の犯した罪を受け入れていた彼〔豊田亨〕は、後に「死刑」を宣告されることになる。しかし、教祖の近くまで行きながらも、「かろうじて」犯罪の指令を受けなかった僕は、たとえ現実にはその境遇に立たされなかったとはいえ、彼の境遇を想像することなく生活することなど不可能になってしまった。／僕という人間は「ぎりぎりで生かされて」いる存在でしかなく、「かろうじて許容されている」に過ぎない存在なのだ、ということに気づかされたのだった。（291〜292頁）

「確かなもの」を求めてオウム真理教の門をくぐった著者でしたが、そこから出てきたときに残っていたのは大きな「不確かさ」でした。そして著者はその「不確かさ」を抱えて生きることを決意するのです。

この世の救済のために、人が人を抹殺するところまで行ってしまった宗教思想に、神がなんと応えうるのか。僕は知りたい。そして、なおも「沈黙」を続ける「神」と、僕は闘っているのかもしれないと思う。（292〜293頁）

著者にとっての神は「沈黙」しています。それでも「神の沈黙」に問い続けるという生き方。それは著者の求めていた救いからは程遠いものかもしれませんが、もはや著者にはそのようにしか生きることができないのです。

確固とした修行システムが確立していたオウム真理教においては、きわめて客観的に自分の修行者としての「ステージ」を確かめることができたようです。しかしオウムの惨劇を見、その現実を真正面から受け止めなければならなかった著者は、もはやオウム的な「ゲーム」の中で無邪気に遊ぶことはできません。そのような価値観の挫折を一度経験してしまった以上、他のどのような価値体系の中でも安住することはできないかもしれません。

もしかすると答えを得られないまま一生を終えるかもしれない。それでも問い続けることを、著者は「闘い」と表現するのです。それは麻原彰晃が達成したという「最終解脱」とは正反対の、不安定で人間に苦しみばかりをもたらすものなのかもしれません。それでも本書を読み終えた読者なら、著者の生きることへの誠実さに胸を打たれ、この著者なら答えを得られない闘いを闘い続けられるのではないか、と思うことでしょう。

闇の中を迷いつつ手探りして、それでも進み続ける人間の姿は、それを見る者に生きる勇気を与えてくれるものです。それは決して「救済」や「解脱」といった宗教的理想に到達した人間の姿ではありません。しかし私たち人間がすべてを投げ出して虚無感に身を任せたくなる時に、生きることを諦めさせないのは、宗教の理念や理想よりもむしろ、それらを得られなくてももがき続ける同じ人間の姿なのではないでしょうか。その意味で、救いを得られず暗闇で格闘するということによって、人は知らない間にほかの誰かを少しだけ救っているのかもしれません。だとすると、答えのない日常をそれでも懸命に生きることは、ある意味できわめて宗教的な実践なのだと言えるでしょう。そしてそれは「解脱」や「成就」の達成を目標とするオウム的な修行とは正反対の実践です。

著者の求道の記録である本書を読んで、読者は「どこかに到達すること」ではなく「途上にあり続けること」の意味を感じられると思います。

【書店員G】

第9回…「偶像」だって言うけれど…
宗教・文化の多様性とどう向き合うか

臨床心理士
坂岡　大路
1988年京都府生まれ。北海道大学大学院教育学院臨床心理学講座修士課程修了。訪問型フリースクールや、中学校、児童デイサービスなどでのボランティア経験を経て、現在、札幌市内の児童精神科に勤務。臨床心理士、公認心理師。2019〜2021年『成長』（いのちのことば社）誌に「ころんで学ぶ教会学校」を連載。

賛否両論のオリンピックがひとまず終わりました。潜在していた様々な問題や対立があぶり出される、この痛ましいプロセスの中で、私達は良くも悪くも「多様性」の問題に向き合わざるをえない状況を再認識しています。この問題は、性別や障害の有無だけでなく、民族や文化、そして宗教の多様性を含むものです。

私の友人のカオルくんはまっすぐな信仰心の持ち主ですが、高校時代、「これでよかったのか？」と悩んでしまう出来事を経験しました。お盆のある日、おばあちゃんの家に行った時のことです。おばあちゃんは、カオルくんを仏壇の前に連れてきて、こう言います。

「カオルが教会に通ってるのは知ってるよ。でもね、おじいちゃんに一言あいさつぐらい、してくれてもいいじゃないの。」おばあちゃんはこう言って、「仏壇の前で手を合わせてほしい」と訴えたそうです。カオルくんは、「これは教会学校で習った偶像に手を合わせるってことかも」と、思いました。彼はきっぱりと断ります。

おばあちゃんは目に涙を浮かべ、「カオルをあんなに愛してくれたおじいちゃんのことを、忘れちゃったのかい？」と嘆きました。カオルくんは「でも…」と言ったきり、返す言葉を失ったそうです。カオルくんは「あれで本当によかったのかなあ…」と悩み、友達に相談していました。

こうした文化間摩擦の体験談は、教会の子どもたちからも度々聞かされるものです。「偶像崇拝はいけません」。確かに、聖書にはそう書いてあります。しかし、実際の生活場面では臨機応変な知恵が必要だとつくづく思わされます。それも愛ある知恵が。カオルくんの葛藤はどこにあったのでしょうか。「大切な人の思いに応えてあげたい」気持ちと「偶像崇拝をしてはいけない」という気持ち。二つの想いがせめぎ合っているのです。

このテーマに絶対の正解はないでしょう。その場の文脈や人間関係に応じて考えなければならない、ケースバイケースの問題だからです。しかし、ある程度の考え方のヒントであれば示すことができるかもしれません。

臨床心理士の益子洋人は、著書の中で「統合的葛藤解決」という理論を紹介しています（『教師のための子どものもめごと解決テ

クニック』金子書房）。この理論によると、お互いの希望が食い違った時の解決の仕方には五つのパターンがあります。

第一に「回避」。これは、相手とのやり取りそのものを打ち切る方法です。たとえば、そもそもおばあちゃんの家に行かなければ、葛藤を経験しないですむかもしれません。

第二に「支配」。自分の要求だけを一方的に相手にのませることです。「偶像崇拝だから仏壇を捨てなさい」と強要するなら、それは「支配」になるでしょう。

第三に「服従」。相手の要望に全面的に従い、我慢することです。「違和感を抱えながらイヤイヤ仏壇に手を合わせる」ことがこれに該当すると思います。

第四に「妥協」。これは、相手の希望と自分の希望を半分ずつ満たすことです。これは一見平等で素晴らしい方法に見えますが、必ずしも円満な解決につながりません。たとえば、「私は仏壇に手を合わせるから、おばあちゃんはイエス様にお祈りして」とお願いする…。誰の得にもならないことは明らかですね。

「統合的葛藤解決」が目指すのは、第五の道、「統合」です。これは、お互いの希望とそうしたい理由について聴き合い、確かめ合うこと。その上で、できるだけ両者が納得できる方法を探っていくことです。

カオルくんとおばあちゃんのケースについて考えてみましょう。カオルくんは「偶像崇拝の禁止」と「愛」をどちらも大事にしています。一方、おばあちゃんは「仏壇に手を合わせてほしい」と言っています。しかし、「仏壇に手を合わせてほしい」は表面的な希望です。おばあちゃんは「なぜ」仏壇に手を合わせてほしいのでしょうか。「孫のことを愛してくれたおじいちゃんのことを忘れないでほしい。おじいちゃんを偲ぶ気持ち、愛する気持ちを、孫にも共有してほしい」…そういう願いが、おばあちゃんにあったのではないでしょうか。おばあちゃんの表面的な希望に応じることはできないかもしれませんが、潜在的な希望には応じられるはずです。なぜなら、「自分の隣人（おじいちゃんとおばあちゃん）を愛する」ことは、キリスト教においても大切な価値だからです。たとえば、こんな風に答えてあげるのはどうでしょうか。

「おばあちゃん。ぼくも、おじいちゃんのことを大切に思ってるよ。その思いは同じだよ。おじいちゃんのこと、ぼくは忘れない。いろんな所に連れて行ってくれたり、遊んでくれたりしたよね。本当に優しいおじいちゃんだった。それは、ぼくにとって大事な思い出だよ。だから手は合わせられないけど、おじいちゃんのためにお祈りさせてくれない？」

くり返しますが、これは絶対の正解ではありません。この答えでおばあちゃんが納得してくれるともかぎりません。もしおばあちゃんが納得しなければ、引き続き互いの想いを聴き合い、尋ね合っていく必要があると思います。しかし、こ

こで私が強調したいのは、教義的に正しい模範解答を出すことでも、闇雲に相手に同調することでもありません。故人への深い愛情それ自体を、「偶像だから」の一言ではねつけてしまうのは、それこそ「愛」のない振る舞いと思われてしまわないか。相手を「隣人」としてでなく、「裁きの対象」として見てしまっていないか…。そんな心配が、私の頭に浮かんでくるのです。おばあちゃんもまた、自分と同じように泣き、笑い、喜び、悲しみ、誰かを愛し、悼み、懐かしんでいる、かけがえのない歴史を背負った、ひとりの人間なのです。「正しさ」への固執は、そんな当たり前の事実をいとも簡単に忘れさせてしまいます。

異文化に福音を伝えていたパウロは、手紙の中でこう述べました。

「ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました。それはユダヤ人を獲得するためです。律法の下にある人々には、私自身は律法の下にはいませんが、律法の下にある者のようになりました。それは律法の下にある人々を獲得するためです。律法を持たない人々に対しては、―私は神の律法の外にある者ではなく、キリストの律法を守る者ですが、―律法を持たない者のようになりました。それは律法を持たない人々を獲得するためです。弱い人々には、弱い者になりました。弱い人々を獲得するためです。すべての人に、すべてのものとなりました。それは、何とかして、幾人かでも救うためです。」
（第一コリント9：20－22）

相手の身になろうとする想像力がなければ、どんなに固い信仰でも「何の値打ちもない」とパウロは言い切ります（第一コリント13：1－2）。伝道は相手の感情を否定することではなく、まず隣人になること、相手の歴史と想いを尊重することから始まるはずです。いえ、これは伝道云々以前に、「人間」を相手にする上で決して蔑ろにできない、礼儀作法（politeness）のファーストステップだと思います。

私達の社会は「他者」で溢れています。異なる人種。異なる国籍。異なる出自。異なる文化。異なる民族。異なる宗教。年令、性別の違い。病気や障害の有無…。しかし、クリスチャンが信じているのは、「全く立場の異なる存在と視点を共有しようとした神」（人となった神）です。こんな時代だからこそ、ひとりのキリスト者として、その原点をあらためて思い起こしたいと思うのです。

からしだね館のひとこま
―こころ病む人の支援

京都市東部障害者地域生活支援センター・からしだねセンター主任
武山 世里子（精神保健福祉士・相談支援専門員）

この連載では、からしだねで出会う人たちの「喪失」について取り上げてきました。「喪失」を経験した人たちのストーリーをみなさんとシェアしながら、「喪失」から見える世界を一緒に考えていきたいな、そんな思いで書いています。

「喪失」の中で育ったSさん

今日の主人公は、20代後半の男性、Sさんです。Sさんは50代の母親との2人暮らしです。母親はSさんが生まれる前からこころの病で家に閉じこもり、他者との交流を避けて暮らすようになりました。小学校に上がる前に両親が離婚し、母方の祖母が時々やってきて、Sさん一家のお手伝いをしに来てくれていました。

Sさんの母親は自分の親さえも信じられず、Sさんが中学生になるころには、祖母の出入りも母親が禁止するようになり、現在まで、ほぼ2人だけでひっそりと暮らしてきました。

母親はSさんに、外の世界の人たちがどれだけ怖い人たちか、外から入ってくるもの全てが安全なものではない、との認識を植え付けました。息子の命をおびやかすものから守りたい一心で、Sさんを学校に行かせることもしませんでした。

母親は生の食材は一切口にしません。そのため、Sさんは生の食材で調理されたものを口にせずに大きくなりました。ある時からカロリーメイトや栄養ドリンク、カップ麺やスープなどを食事がわりにするようになりました。このような食事は、○○スーパーの戸別配達やネットショップがあるので、外出することなく購入することができます。オンラインでいろいろなことができるようになり、彼らの外出する機会は年々減っていきました。

学校や児童相談所はその時々に、この一家にかかわってきました。Sさんが学校に行けるように、家で栄養のある食事を食べられるように、何とか支援につなげようとしました。しかし、母親がSさんを抱え込み、第3者が割って入ることを許しませんでした。また、Sさん自身も、ものすごい力で第3者の介入に抵抗しました。

幼い時から母親に「外に出たら怖い人がいっぱい」と育てられたSさんは、「他者への信頼」を喪失していたでしょう。児童相談所、学校、行政、医療などの外部の支援機関との接触を断固として拒否した母親の元で、「社会への信頼」も喪失していたでしょう。

支援につながらないまま、何年もが経過してしまいました。その間、眠剤がないと眠れない母親は、精神科だけは、途切れ途切れで受診をしていました。しかし、コロナが始まったと同時に、それさえもしなくなりました。ネットで市販の睡眠薬を

購入してそれで何とかしのぐようになりました。母親の精神科の医師が「何とかできないか」と彼らのことをずっと気にかけていました。その医師からある日からしだねセンターに支援の依頼が入りました。「母親の病理に取り込まれてしまったSさんを助けてほしい。そしてこの母親も支援につなげられないか」

扉の内側にどうしても入れない…

今までいろいろな専門職が関わってきたにもかかわらず、この状況を改善することができなかったのに、今さら私に何ができるのだろうか…。しかし、この状況を知ってしまった者として、「何もできません」とは言えませんでした。医療や福祉で支援のチームを作り、複数の支援者で根気よくアプローチをしていくことになりました。

この一家は生活保護世帯のため、彼らは保護課とのやりとりだけは避けることができません。しかし、訪問は断固として受け入れてくれません。保護課のケースワーカーさんと一緒に何度も自宅を訪問しましたが、扉を開けてもらえずインターフォン越しに追い返されてしまいます。改善策のないまま数か月が過ぎてしまいました。

ついに扉が開いた！そこで見たものは…

そんなある日、母親から連絡が入りました。「眠れない。睡眠薬をもらってきてほしい。」市販の眠剤では眠れず「もう限界」とのことでした。薬を調達することを交換条件に、直接話をすることを母親に交渉し、何とか扉の内側に入ることができました。

訪問看護師さんと一緒に、初めてSさんと母親に会いました。外部からの「危険人物」である私たちの訪問に備え、頭から足元まで、防護ガウンにナイロン手袋、顔にはゴーグルを着けて、暗い部屋の奥で私たちを迎えてくれました。彼らのやせ細った姿を見て、栄養状態が良くないこともわかりました。

自宅は物であふれかえり、多量のごみが捨てられないままにため込まれていました。週に1回の訪問看護を受け入れるよう、Sさんと母親に交渉し、二人分の薬を届ける条件で同意を得ました。

山が動いた!!! Sさんが外へ!!!

訪問看護師さんは、真夏であっても、クーラーのない彼らの家に、防護ガウン、ゴーグル、手にはナイロンの手ぶくろを着け、彼らを少しでも安心させる格好で訪問を続けてくれました。母親はSさんを訪問看護師に接触させないように、理由をつけては遠ざけていましたが、何度目かの訪問の時に、母親の制止を無視してSさんが、看護師と話をするため自室の扉をあけてくれるようになりました。ある日、Sさんは「コロナワクチンの予防接種を受けたい」と看護師に言いました。彼が自分から「外に出たい」と言ったのです。母親は初めは強くSさんを制止しましたが、彼女自身がワクチンの必要性を感じていたので、訪問看護師の強い交渉の末、Sさんがワクチンを受けるために外に出ることを許可してくれました。看護師の車で接種会場に行くこと、車の中でワクチンの接種をしてもらう（車から外に絶対に出ない）という条件付きでありましたが。

ワクチンを接種することとなったSさんについて看護師から報告を受けました。20代後半の男性とは思えない華奢な体。幼少期から自宅からほとんど出ることなく過ごしてきたせいか、筋肉のまったくない、真っ白な手足。注射のためにまくった腕の細さ。改めて「このままではいけない…。」と、焦りがこみあげてきました。

Sさんの手紙　Sさんの思い

その数日後。訪問看護の時に、Sさんが「手紙」を看護師に渡しました。明らかに母親の目を盗んで書かれたもので、母親に見つからないように看護師にその「手紙」を手渡しました。

それを訪問看護師が興奮した様子で届けてくれました。何かの空き箱の裏に書かれたSさんの手書きの文章は、筆圧が強く、大きなしっかりした文字でした。それには予想もしないような、Sさんの思いがつづられていました。

「他者や社会に対する信頼」を失ったかのように見えたSさんが、今まで恐れの対象でしかなかった「外の人間」（この時は訪問看護師）に渡した手紙とは…（次号につづく）

からしだね舘では、障害のある方の生活全般の相談を受けたり、就労支援をしたりしています。

《お知らせ・1》

◆教会や保育園、幼稚園等で、定期刊行物や新刊書、用品等のご注文をある程度まとめて頂きましたら、月1回、無料の定期便でお届けします。

◆お近くにキリスト教書店が無い場合など、ご希望により、新刊書や用品（グッズ）の訪問販売を検討させて頂きます。ご相談ください。

◆再版発行のリクエストをお寄せください。絶版した良書で、再版してほしいものがありましたら、お知らせください。ある程度リクエストがまとまりましたら、出版社に情報提供したいと思います。

《お知らせ・2》

◆からしだねの「おすすめ本スポンサー」システム◆

あなたのイチ押しの本を、店に置かせていただきます

「この本、ぜひ皆さんに読んでほしい」というあなたのおすすめ本。3か月間店頭に置いてみませんか？残念ながら売れ残ってしまったら、ご自分で買い取ってお友達にプレゼント…という仕組みです。（書店に在庫をためこまず、皆さまの「推薦良書」を広くご紹介いただける。…そうなったらいいなと思っています。）店内配置等については、当店にお任せください。種類によっては、ご希望に沿えない場合もあります。

献本についてのお知らせ

たいへん申し訳ございませんが、
送料をご負担いただけると
ありがたいです。
書店への直接お持ち込みも
ありがたいです。

【献本をお願いしたい本の種類】

1　キリスト教書、キリスト教に関連した本（多少、書き込み等があっても、大丈夫です）
2　哲学、心理学等、人の生き方に関する本
3　社会の中で起きている問題を扱った本
4　暮らし（料理、健康、経済等）にかかわる本
5　小説（人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません）
6　漫画（人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません）

【本の送り先】

住所：〒607-8216　京都市山科区勧修寺東出町75 からしだね館
宛先：CLC からしだね書店　献本係　　電話：075-574-1001　FAX075-574-0025
Mail：clc @ karashidane.or.jp

【本と一緒にいただきたいもの】

以下の内容を記入したメモ
①献本者のお名前②ご住所③お電話番号④メールアドレス⑤さしつかえなければ、献本者の簡単なプロフィール、献本いただいた本の感想や思い出等を一言。⑥献本くださった方のお名前を書店だよりにご紹介させていただきたいと思います。お名前の掲載は困るという方は、お知らせください。
【古本の売上を含む CLC からしだね書店の収益は、すべて、書店で働く障がい者の工賃になります】

編集後記

◆１０月に入ったというのに、汗ばむような毎日。そんななかで、書店では来年のカレンダーと手帳、クリスマス用品の発注業務に入りました。コロナ禍でお客様の動向は読みにくく、右往左往しております。◆同じような先の見えなさ、数字の読めなさに翻弄されながら、世界の経済は動き、生活困窮に陥る人たちを生み出しています。精神的にも経済的にも困窮している人たちに、法人としても書店としても、何かもっと積極的な取り組みができないかと考えているところです。◆「知り合いが統一協会に入ってしまった」という人が来店されました。安倍元総理が統一協会の大規模集会にビデオメッセージを送ったという報道もされましたが、今の時代は、反社会的なカルトの問題がより巧妙に見えにくくなっているように思います。◆読書感想本では、２回にわたって「オウム真理教」にはまっていった人たちのことを取り上げました。彼らと私たちと、どこがどうちがったのか？カルトが「キリスト教会」を名乗っている、あるいはカルトが教会に入り込む、といった問題が起きているなか、私には、その違いは紙一重にすぎず、信仰をもって生きるものにとっては、決して「関係ない」ではすまされないものがあるように思います。◆法人発行の「からしだね通信１０月号」ができました。特集は「性の多様性をどう考える？」です。法人ＨＰからも読むことができます。ご興味のある方はどうぞご覧になってください。【店長】

編集・発行：社会福祉法人ミッションからしだね
就労継続支援Ａ・Ｂ型事業所からしだねワークス
からしだね書店＆カフェ・トライアングル
〒607-8216 京都市山科区勧修寺東出町 75 からしだね館
書店電話番号　075-574-1001　ＦＡＸ　075-574-0025
書店メール　clc@karashidane.or.jp

CLCからしだね書店だよりの
バックナンバーはこちらから